

問 1.

$$\frac{3x^2 - 3x - 9}{(x+2)(x+3)(x-1)^2} = \frac{a}{x+2} + \frac{b}{x+3} + \frac{c}{x-1} + \frac{d}{(x-1)^2}$$

両辺に $(x+2)(x+3)(x-1)^2$ をかけて、

$$3x^2 - 3x - 9 = a(x+3)(x-1)^2 + b(x+2)(x-1)^2 + c(x+2)(x+3)(x-1) + d(x+2)(x+3)$$

ただし, $x \neq 1, -2, -3$. しかし, これが $1, -2, -3$ を除く全ての x について成立するには, $x = 1, -2, -3$ でも成立することが必要.

$x = -2$ を代入して、

$$9 = 9a \iff a = 1$$

$x = -3$ を代入して、

$$27 = -16b \iff b = -\frac{27}{16}$$

$x = 1$ を代入して、

$$-9 = 12d \iff d = -\frac{3}{4}$$

両辺の 3 次の項を比較して、

$$0 = a + b + c \iff c = \frac{11}{16}$$

以上より、

$$a = 1, b = -\frac{27}{16}, c = \frac{11}{16}, d = -\frac{3}{4}$$

コメント 上記の解答に納得がいかなければ係数比較でも解決する.

問 2.

$e^x = \sum_{i=0}^n a_i x^i$ とかけたとする ($a_i \in \mathbb{R}, a_n \neq 0$). $e^x \equiv 0$ ではないのこれでよい. すると、

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{e^x}{x^n} = \lim_{x \rightarrow -\infty} \left(a_n + \sum_{i=0}^{n-1} \frac{a_i}{x^{n-i}} \right) = a_n$$

ところが、 $\lim_{x \rightarrow -\infty} e^x = 0$ なので、

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{e^x}{x^n} = 0$$

これは $a_n \neq 0$ に矛盾. ゆえに、 e^x は x の多項式では表せない.

$\sin x = \sum_{i=0}^n a_i x^i$ とかけたとする ($a_i \in \mathbb{R}, a_n \neq 0$). すると、

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{\sin x}{x^n} = \lim_{x \rightarrow -\infty} \left(a_n + \sum_{i=0}^{n-1} \frac{a_i}{x^{n-i}} \right) = a_n$$

ところが、 $\sin x$ は有界なので、

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{\sin x}{x^n} = 0$$

これは $a_n \neq 0$ に矛盾. ゆえに、 $\sin x$ は x の多項式では表せない.

$e^x = \sum_{i=0}^n a_i x^i$ とかけたとする ($a_i \in \mathbb{R}, a_n \neq 0$). 両辺の $(n+1)$ 階微分を取ると、

$$e^x = 0$$

これは明らかに矛盾. ゆえに、 e^x は x の多項式では表せない.

$\sin x = \sum_{i=0}^n a_i x^i$ とかけたとする ($a_i \in \mathbb{R}, a_n \neq 0$). 両辺の $(n+1)$ 階微分を取ると、

$$\sin x = 0$$

これは明らかに矛盾. ゆえに, $\sin x$ は x の多項式では表せない.

$\sin x = \sum_{i=0}^n a_i x^i$ とかけたとする ($a_i \in \mathbb{R}, a_n \neq 0$). $\sin x = 0$ は少なくとも $x = 0, \pi, 2\pi, 3\pi, \dots, n\pi$ の $(n+1)$ 個の相異なる実数解を持つが, $\sum_{i=0}^n a_i x^i = 0$ は高々 n 個の相異なる実数解しか持たず, 矛盾. ゆえに, $\sin x$ は x の多項式では表せない.

コメント いろいろな方法が考えられる. 上で挙げたものの他にもまだあると思う.

問 3.

$\{a_n\}$ が 0 に収束するので, 正の実数 ε に対してある N が存在して,

$$n > N \Rightarrow |a_n| < \varepsilon$$

となる. $|a_i|$ ($1 \leq i \leq N$) の最大値を M とする. $n > N$ のとき,

$$\begin{aligned} |b_n| &= \left| \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_N + a_{N+1} + \dots + a_n}{n} \right| \\ &\leq \frac{|a_1| + |a_2| + \dots + |a_N| + |a_{N+1}| + \dots + |a_n|}{n} \\ &< \frac{NM + (n-N)\varepsilon}{n} \\ &= \varepsilon + \frac{N(M-\varepsilon)}{n} \end{aligned}$$

ここで, $n > \frac{N(M-\varepsilon)}{\varepsilon}$ とすれば,

$$\begin{aligned} |b_n| &< \varepsilon + \varepsilon \\ &= 2\varepsilon \end{aligned}$$

ゆえに, $\{b_n\}$ も 0 に収束する.

コメント 数学 IA 演習にもあった問題である. そちらも参考にするとよい.

問 4.

b_n は単調増加列で,

$$\begin{aligned} b_n &= 1 + 1 + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \frac{1}{4!} + \dots + \frac{1}{n!} \\ &\leq 1 + 1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{2^2} + \frac{1}{2^3} + \dots + \frac{1}{2^{n-1}} \\ &\leq 1 + \frac{1 - \frac{1}{2^n}}{1 - \frac{1}{2}} \\ &= 3 - \frac{1}{2^{n-1}} \\ &\leq 3 \end{aligned}$$

より, 上に有界. よって, b_n は収束する. 次に,

$$\begin{aligned} a_n &= \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n \\ &= 1 + {}_n C_1 \cdot \frac{1}{n} + {}_n C_2 \cdot \frac{1}{n^2} + {}_n C_3 \cdot \frac{1}{n^3} + \dots + {}_n C_n \cdot \frac{1}{n^n} \\ &= 1 + 1 + \frac{1}{2!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) + \frac{1}{3!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) + \dots + \frac{1}{n!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) \dots \left(1 - \frac{n-1}{n}\right) \\ &\leq 1 + 1 + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \dots + \frac{1}{n!} \\ &= b_n \\ &\leq 3 \end{aligned}$$

よって, a_n は上に有界. さらに,

$$a_n = 1 + 1 + \frac{1}{2!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) + \frac{1}{3!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) + \dots + \frac{1}{n!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) \dots \left(1 - \frac{n-1}{n}\right)$$

$$a_{n+1} = 1 + 1 + \frac{1}{2!} \left(1 - \frac{1}{n+1}\right) + \frac{1}{3!} \left(1 - \frac{1}{n+1}\right) \left(1 - \frac{2}{n+1}\right) + \cdots + \frac{1}{n!} \left(1 - \frac{1}{n+1}\right) \left(1 - \frac{2}{n+1}\right) \cdots \left(1 - \frac{n-1}{n+1}\right) \\ + \frac{1}{(n+1)!} \left(1 - \frac{1}{n+1}\right) \left(1 - \frac{2}{n+1}\right) \cdots \left(1 - \frac{n-1}{n+1}\right) \left(1 - \frac{n}{n+1}\right)$$

について、それぞれの $\frac{1}{k!}$ ($1 \leq k \leq n$) の係数は a_n よりも a_{n+1} の方が大きく、項の数も a_{n+1} の方が一つ多いので、

$$a_n < a_{n+1}$$

よって、 a_n も収束する。 $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} b_n$ を示す。 $a_n \leq b_n$ なので、 $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n \leq \lim_{n \rightarrow \infty} b_n$ である。今、 $n > m$ として、

$$a_n = 1 + 1 + \frac{1}{2!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) + \frac{1}{3!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) + \cdots + \frac{1}{n!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) \cdots \left(1 - \frac{n-1}{n}\right) \\ \geq 1 + 1 + \frac{1}{2!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) + \frac{1}{3!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) + \cdots + \frac{1}{m!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) \cdots \left(1 - \frac{m-1}{n}\right)$$

$n \rightarrow \infty$ として、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n \geq 1 + 1 + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \cdots + \frac{1}{m!} \\ = b_m \\ \therefore \lim_{n \rightarrow \infty} a_n \geq \lim_{n \rightarrow \infty} b_n$$

よって、 $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} b_n$ となる。

コメント 過去の期末試験では 2/2 の割合で出題されているので今回も出題されるかもしれない。 $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} b_n$ の証明は少し技巧的なのでしっかり抑えておくこと。

問 5.

$$(1) 1 - \frac{1}{\sqrt{2}} + \frac{1}{\sqrt{3}} - \frac{1}{\sqrt{4}} + \frac{1}{\sqrt{5}} - \frac{1}{\sqrt{6}} + \cdots \\ (2) 1 + \frac{1}{\sqrt{3}} - \frac{1}{\sqrt{2}} + \frac{1}{\sqrt{5}} + \frac{1}{\sqrt{7}} - \frac{1}{\sqrt{4}} + \frac{1}{\sqrt{9}} + \frac{1}{\sqrt{11}} - \frac{1}{\sqrt{6}} + \cdots$$

(1) については、各項の絶対値が 0 に単調に収束する交代級数なので、収束する。(2) について、初めの $3n$ 項の和を S_n として、

$$S_n = \sum_{i=1}^n \left(\frac{1}{\sqrt{4i-3}} + \frac{1}{\sqrt{4i-1}} - \frac{1}{\sqrt{2i}} \right) \\ = \sum_{i=1}^n \frac{1}{i} \left(\frac{1}{\sqrt{4-\frac{3}{i}}} + \frac{1}{\sqrt{4-\frac{1}{i}}} - \frac{1}{\sqrt{2}} \right) \\ \geq \sum_{i=1}^n \frac{1}{\sqrt{i}} \left(\frac{1}{\sqrt{4}} + \frac{1}{\sqrt{4}} - \frac{1}{\sqrt{2}} \right) \\ = \left(1 - \frac{1}{\sqrt{2}}\right) \sum_{i=1}^n \frac{1}{\sqrt{i}} \\ \geq \left(1 - \frac{1}{\sqrt{2}}\right) \sum_{i=1}^n \frac{1}{i}$$

$\sum_{i=1}^n \frac{1}{i}$ は発散するので S_n も発散。よって、(2) の級数は発散。

コメント (1) で用いた定理は重要なのでしっかり確認しておくこと。

交代級数 $S_n = \sum_{i=0}^n (-1)^i a_i$ ($a_i \geq 0$) は、 a_i が 0 に単調に収束する、すなわち $a_0 \geq a_1 \geq a_2 \geq \cdots \geq a_n \geq \cdots$ かつ $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$ のとき、収束する。

(2) は、各項の大きさを大雑把に $\frac{1}{\sqrt{k}}$ で計ってみると解決する。級数の収束判定に便利な定理をいくつか挙げる。

級数 $S_n = \sum_{i=0}^n a_i$ に対して、 $T_n = \sum_{i=0}^n b_i$ が優級数であるとは、任意の k について $|a_i| \leq b_i$ が成立することを言う。 S_n の優級数 T_n が収束するとき、 S_n も収束する。逆に、 S_n が発散するとき、その優級数 T_n も発散。

特に、 $b_i = |a_i|$ とすれば、 T_n は S_n の優級数となる。

級数 $S_n = \sum_{i=0}^n a_i$ は、 $\sum_{i=0}^n |a_i|$ が収束すれば (このことを S_n は絶対収束するという)、 S_n も収束する。

絶対収束はしないが収束はすることを“条件収束する”という。条件収束する級数は、各項を適当に並び替えることによっていかなる値にも収束させることができ、あるいは正負の無限大に発散させることもできる。この問題がその一例となっている。(1)の級数は収束するが条件収束であるので、(2)のように並び替えることで発散させることができるのである(絶対収束ではこのようなことは起こらない)。その証明で、

調和級数 $S_n = \sum_{i=1}^n \frac{1}{i}$ は発散する。

を用いた。このことから、級数 $S_n = \sum_{i=1}^n \frac{1}{i^p}$ は $p \leq 1$ のとき調和級数の優級数となり、発散することがわかる。実は、 $p > 1$ のときは収束する。

級数 $S_n = \sum_{i=0}^n a_i$ は、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \left| \frac{a_{n+1}}{a_n} \right| < 1$ であれば収束し、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \left| \frac{a_{n+1}}{a_n} \right| > 1$ であれば発散する。

級数 $S_n = \sum_{i=0}^n a_i$ は、 $\limsup_{n \rightarrow \infty} \sqrt[n]{|a_n|} < 1$ であれば収束し、 $\limsup_{n \rightarrow \infty} \sqrt[n]{|a_n|} > 1$ であれば発散する。

問 6.

$n \in \mathbb{N} \cup \{0\}$ のとき $f(nt) = nf(t)$ であることを示す。与えられた式で $x = y = 0$ として、

$$f(0) = f(0) + f(0)$$

よって、 $f(0) = 0$ となり、 $n = 0$ のときは成立。 $n = k$ のとき成立すると仮定して、与えられた式で $x = kt, y = t$ として、

$$f((k+1)t) = f(kt) + f(t) = kf(t) + f(t) = (k+1)f(t)$$

よって、 $n = k+1$ でも成立。よって、数学的帰納法より、 $n \in \mathbb{N} \cup \{0\}$ のとき $f(nt) = nf(t)$ 。また、与えられた式で $y = -x$ として、

$$f(x) + f(-x) = f(x-x) = f(0) = 0$$

よって、 $f(-x) = -f(x)$ 。ゆえに、 $n \in \mathbb{Z}$ のとき $f(nt) = nf(t)$ が成立。 $p \in \mathbb{N}, q \in \mathbb{Z}$ として、

$$\begin{aligned} p \cdot f\left(\frac{q}{p}\right) &= f\left(p \cdot \frac{q}{p}\right) = f(q) = qf(1) \\ \therefore f\left(\frac{q}{p}\right) &= \frac{q}{p}f(1) \end{aligned}$$

よって、 $t \in \mathbb{Q}$ のとき $f(t) = tf(1)$ が成立。 $t \in \mathbb{R}$ のとき、 t に収束する有理数列 t_n をとれば、 $f(x)$ の連続性より、

$$f(t) = \lim_{n \rightarrow \infty} f(t_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} t_n \cdot f(1) = tf(1)$$

よって、題意を満たす関数は $f(x) = ax$ (a は定数) に限る。また、このとき条件を満たすことは明らか。

コメント 有名な問題で、やり方はほぼ決まっている。

問 7.

(a) 二項定理の拡張。

$$\begin{aligned} (1+x)^\lambda &= 1 + \lambda x + \frac{\lambda(\lambda-1)}{2}x^2 + \frac{\lambda(\lambda-1)(\lambda-2)}{6}x^3 + \dots \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\lambda(\lambda-1)(\lambda-2)\dots(\lambda-n+1)}{n!}x^n \end{aligned}$$

(b) まず,

$$\frac{1}{1+t} = 1 - t + t^2 - t^3 + t^4 - t^5 + \dots$$

両辺を 0 から t で積分して,

$$\log(1+t) = t - \frac{t^2}{2} + \frac{t^3}{3} - \frac{t^4}{4} + \frac{t^5}{5} - \frac{t^6}{6} + \dots$$

$t = x^2$ として,

$$\begin{aligned} \log(1+x^2) &= x^2 - \frac{x^4}{2} + \frac{x^6}{3} - \frac{x^8}{4} + \frac{x^{10}}{5} - \frac{x^{12}}{6} + \dots \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^{n-1} x^{2n}}{n} \end{aligned}$$

(c) $\sin^2 x = \frac{1 - \cos 2x}{2}$, $\cos x = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n x^{2n}}{(2n)!}$ なので,

$$\sin^2 x = 2x^2 \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n 2^{2n} x^{2n}}{(2n+2)!}$$

(d) $f(x) = \frac{x}{e^x - 1}$ とする.

$$\frac{1}{f(x)} = \frac{e^x - 1}{x} = 1 + \frac{x}{2} + \frac{x^2}{3!} + \frac{x^3}{4!} + \frac{x^4}{5!} + \dots$$

$f(x) = a_0 + a_1 x + a_2 x^2 + a_3 x^3 + a_4 x^4 + \dots$ として,

$$1 = f(x) \cdot \frac{1}{f(x)} = a_0 + \left(\frac{a_0}{2!} + a_1\right)x + \left(\frac{a_0}{3!} + \frac{a_1}{2!} + a_2\right)x^2 + \left(\frac{a_0}{4!} + \frac{a_1}{3!} + \frac{a_2}{2!} + a_3\right)x^3 + \left(\frac{a_0}{5!} + \frac{a_1}{4!} + \frac{a_2}{3!} + \frac{a_3}{2!} + a_4\right)x^4 + \dots$$

$$\therefore a_0 = 1, a_1 = -\frac{1}{2}, a_2 = \frac{1}{12}, a_3 = 0, a_4 = -\frac{1}{720}$$

以上より,

$$\frac{x}{e^x - 1} = 1 - \frac{x}{2} + \frac{x^2}{12} - \frac{x^4}{720} + \dots$$

コメント $e^x, \sin x, \cos x, (1+x)^a, \frac{1}{1+x}, \log(1+x)$ などは覚えてしまおう。あとは、微分や積分, 和, 差, 積, 商, 合成関数によって, 大抵のべき級数展開は求まるはずである。この問題では不要だが, 先にあげた関数のべき級数展開は収束半径も一緒に覚えるとよ

い. 少しまとめると, $a \notin \mathbb{Z}$ とし, $f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} p_n x^n, g(x) = \sum_{n=0}^{\infty} q_n x^n$ の収束半径を $r_f, r_g (r_f \geq r_g)$ として,

			収束半径
e^x	$= 1 + x + \frac{x^2}{2!} + \frac{x^3}{3!} + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{x^n}{n!}$	∞
$\sin x$	$= x - \frac{x^3}{3!} + \frac{x^5}{5!} - \frac{x^7}{7!} + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n x^{2n+1}}{(2n+1)!}$	∞
$\cos x$	$= 1 - \frac{x^2}{2!} + \frac{x^4}{4!} - \frac{x^6}{6!} + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n x^{2n}}{(2n)!}$	∞
$(1+x)^a$	$= 1 + ax + \frac{a(a-1)}{2!}x^2 + \frac{a(a-1)(a-2)}{3!}x^3 + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} {}_a C_n x^n$	1
$\frac{1}{1+x}$	$= 1 - x + x^2 - x^3 + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n x^n$	1
$\log(1+x)$	$= x - \frac{x^2}{2} + \frac{x^3}{3} - \frac{x^4}{4} + \dots$	$= \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(-1)^{n-1} x^n}{n}$	1
$f(x) \pm g(x)$	$= (p_0 \pm q_0) + (p_1 \pm q_1)x + (p_2 \pm q_2)x^2 + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} (p_n \pm q_n)x^n$	r_g 以上
$f(x)g(x)$	$= p_0q_0 + (p_0q_1 + p_1q_0)x + (p_0q_2 + p_1q_1 + p_2q_0)x^2 + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} \left(\sum_{m=0}^n p_m q_{m-n} \right) x^n$	r_g 以上
$f'(x)$	$= p_1 + 2p_2x + 3p_3x^2 + \dots$	$= \sum_{n=1}^{\infty} n p_n x^{n-1}$	r_g
$\int_0^x f(x)dx$	$= p_0x + \frac{p_1x^2}{2} + \frac{p_2x^3}{3} + \frac{p_3x^4}{4} + \dots$	$= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{p_n x^{n+1}}{n+1}$	r_g

商, 合成関数については面倒なので割愛する.

問 8.

(a)

$$f(x) = x \cdot (1 + x^{50} + x^{100} + x^{150} + \dots) = x + x^{51} + x^{101} + x^{151} + \dots = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

ゆえに,

$$\frac{f^{(100)}(0)}{100!} = 0, \frac{f^{(101)}(0)}{101!} = 1$$

$$f^{(100)}(\mathbf{0}) = \mathbf{0}, f^{(101)}(\mathbf{0}) = \mathbf{101!}$$

(b)

$$f(x) = \left(x^{100} - \frac{x^{300}}{3!} + \dots \right) \cdot (1 - x + x^2 + \dots) = x^{100} - x^{101} + x^{102} + \dots = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

ゆえに,

$$\frac{f^{(100)}(0)}{100!} = 1, \frac{f^{(101)}(0)}{101!} = -1, f^{(100)}(\mathbf{0}) = \mathbf{100!}, f^{(101)}(\mathbf{0}) = \mathbf{-101!}$$

コメント なぜかこの問題は過去問でよく出題される. 抑えておこう.

問 9.

$$\sum_{n=0}^{\infty} n!x^n$$

を考える。収束半径は、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{n!}{(n+1)!} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n+1} = 0$$

より、0. ゆえに、 $x \neq 0$ で発散。 $x = 0$ では 1 に収束。あるいは、 $x \neq 0$ のとき $\lim_{n \rightarrow \infty} n!x^n = +\infty$ なので発散、といってもよい。

コメント 他にもあるだろうが有名な例を挙げておいた。収束半径が 0 となる級数を探せばよい。

問 10.

$f(x) = \frac{x}{e^x - 1}$ とする。 $g(x) = \frac{x}{e^x - 1} - 1 + \frac{x}{2}$ が偶関数であることを示す。

$$\begin{aligned} g(x) - g(-x) &= \left(\frac{x}{e^x - 1} - 1 + \frac{x}{2} \right) - \left(\frac{-x}{e^{-x} - 1} - 1 - \frac{x}{2} \right) \\ &= x + \frac{x}{e^x - 1} + \frac{xe^x}{1 - e^x} \\ &= x + \frac{x(1 - e^x)}{e^x - 1} \\ &= 0 \end{aligned}$$

ゆえに $g(x)$ は偶関数で、 $f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{a_n}{n!} x^n$ としたとき、 $a_0 = 1, a_1 = -\frac{1}{2}, a_{2n+1} = 0 (n = 1, 2, \dots)$ となる。

$$1 = f(x) \cdot \frac{e^x - 1}{x} = \left(\sum_{n=0}^{\infty} \frac{a_n}{n!} x^n \right) \cdot \left(\sum_{n=0}^{\infty} \frac{x^n}{(n+1)!} \right)$$

これを展開して x^n の項を比較すると、($n \geq 1$)

$$\frac{a_n}{n!} + \frac{a_{n-2}}{(n-1)!2!} + \frac{a_{n-2}}{(n-2)!3!} + \dots + \frac{a_1}{1!n!} + \frac{a_0}{(n+1)!} = 0$$

両辺に $(n+1)!$ をかけて、

$${}_{n+1}C_n a_n + {}_{n+1}C_{n-1} a_{n-1} + {}_{n+1}C_{n-2} a_{n-2} + \dots + {}_{n+1}C_1 a_1 + {}_{n+1}C_0 a_0 = 0$$

$n = 2$ として、

$$\begin{aligned} {}_3C_2 a_2 + {}_3C_1 a_1 + {}_3C_0 a_0 &= 0 \\ 3a_2 + 3 \cdot \frac{1}{2} + 1 &= 0 \\ \therefore a_2 &= \frac{1}{6} \end{aligned}$$

$n = 4$ として、($a_{2n+1} = 0 (n = 1, 2, \dots)$ に注意)

$$\begin{aligned} {}_5C_4 a_4 + {}_5C_2 a_2 + {}_5C_1 a_1 + {}_5C_0 a_0 &= 0 \\ 5a_4 + 10 \cdot \frac{1}{6} + 5 \cdot \frac{1}{2} + 1 &= 0 \\ \therefore a_4 &= -\frac{1}{30} \end{aligned}$$

$n = 6$ として、

$$\begin{aligned} {}_7C_6 a_6 + {}_7C_4 a_4 + {}_7C_2 a_2 + {}_7C_1 a_1 + {}_7C_0 a_0 &= 0 \\ 7a_6 + 35 \cdot \left(-\frac{1}{30} \right) + 21 \cdot \frac{1}{6} + 7 \cdot \frac{1}{2} + 1 &= 0 \\ \therefore a_6 &= \frac{1}{42} \end{aligned}$$

$n = 8$ として,

$${}^9C_8 a_8 + {}^9C_6 a_6 + {}^9C_4 a_4 + {}^9C_2 a_2 + {}^9C_1 a_1 + {}^9C_0 a_0 = 0$$

$$9a_8 + 84 \cdot \frac{1}{42} + 126 \cdot \left(-\frac{1}{30}\right) + 36 \cdot \frac{1}{6} + 9 \cdot \frac{1}{2} + 1 = 0$$

$$\therefore a_8 = -\frac{1}{30}$$

$$\frac{(-1)^{n+1} B_n x^{2n}}{(2n)!} = \frac{a_n x^{2n}}{(2n)!} \text{ より } B_n = (-1)^{n+1} a_n \text{ なので,}$$

$$B_1 = \frac{1}{6}, B_2 = \frac{1}{30}, B_3 = \frac{1}{42}, B_4 = \frac{1}{30}$$

コメント 問題文で $g(x)$ が偶関数であることが与えられているので最初の部分は割愛してもよいかもしれない。 B_n を求めるのは、面倒だが難しくはない。Bernoulli 数について補足しておく。最初の数項は,

$$B_1 = \frac{1}{6}, B_2 = \frac{1}{30}, B_3 = \frac{1}{42}, B_4 = \frac{1}{30}, B_5 = \frac{5}{66}, B_6 = \frac{691}{2730}, B_7 = \frac{7}{6}, B_8 = \frac{3617}{510}, B_9 = \frac{43867}{798}, B_{10} = \frac{174611}{330}$$

となる。実は, $B_n > 0$, $\lim_{n \rightarrow \infty} B_n = \infty$ である。また, Bernoulli 数は $\frac{x}{e^x - 1} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{B_n x^n}{n!}$ のように定義されることもある。このように定

義すると, B_n は漸化式 $B_0 = 1, B_n = -\frac{1}{n+1} \sum_{i=0}^{n-1} {}^{n+1}C_i B_i$ を満たす。問 13. で示すように, ゼータ関数 $\zeta(x)$ の正の偶数の値に出現す

る。また, べき乗和 $S_k(n) = 1^k + 2^k + 3^k + \dots + n^k = \sum_{i=1}^n i^k$ にも関連し, $S_k(n)$ は

$$\begin{aligned} S_{k-1}(n-1) &= \frac{n^k + {}_k C_1 B_1 n^{k-1} + {}_k C_2 B_2 n^{k-2} + \dots + {}_k C_{k-1} B_{k-1} n}{k} \\ &= \frac{1}{k} \sum_{i=0}^{k-1} {}_k C_i B_i n^{k-i} \\ \text{or } S_k(n) &= \frac{(n+1)^{k+1} + {}_{k+1} C_1 B_1 n^k + {}_{k+1} C_2 B_2 n^{k-1} + \dots + {}_{k+1} C_k B_k n}{k+1} \\ &= \frac{1}{k+1} \sum_{i=0}^k {}_{k+1} C_i B_i n^{k-i} \end{aligned}$$

と表される。

問 11.

まず, $\lim_{h \rightarrow 0} \frac{e^{-\frac{1}{h^2}}}{h^n}$ を示す ($n \in \mathbb{Z}$). $x = \frac{1}{h}$ あるいは $x = -\frac{1}{h}$ として,

$$\lim_{h \rightarrow +0} \frac{e^{-\frac{1}{h^2}}}{h^n} = \lim_{x \rightarrow +\infty} \frac{x^n}{e^{x^2}} = 0$$

$$\lim_{h \rightarrow -0} \frac{e^{-\frac{1}{h^2}}}{h^n} = \lim_{x \rightarrow -\infty} \frac{(-1)^n x^n}{e^{x^2}} = 0$$

ゆえに $\lim_{h \rightarrow 0} \frac{e^{-\frac{1}{h^2}}}{h^n}$ ($n \in \mathbb{Z}$). 次に, $x = 0$ で $f^{(n)} = 0, x \neq 0$ で $f^{(n)}(x) = \frac{(x^2 \text{ の } (n-1) \text{ 次式})}{x^{3n}} e^{-\frac{1}{x^2}}$ を示す。 $n = 1$ のとき, $x \neq 0$ では

$$f'(x) = \frac{2}{x^3} e^{-\frac{1}{x^2}}$$

$x = 0$ では

$$\begin{aligned} f'(0) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x) - f(0)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{e^{-\frac{1}{x^2}}}{h} \\ &= 0 \end{aligned}$$

よって $n = 1$ のとき成立. $n = k$ で成立すると仮定する. $n = k + 1$ のとき, $x \neq 0$ では

$$\begin{aligned} f^{(k+1)}(x) &= \frac{d}{dx} \cdot \left\{ (x^2 \text{の } (k-1) \text{ 次式}) x^{-3k} e^{-\frac{1}{x^2}} \right\} \\ &= x(x^2 \text{の } (k-2) \text{ 次式}) x^{-3k} e^{-\frac{1}{x^2}} + (-3k)(x^2 \text{の } (k-1) \text{ 次式}) x^{-3k-1} e^{-\frac{1}{x^2}} + \frac{2}{x^3} (x^2 \text{の } (k-1) \text{ 次式}) x^{-3k} e^{-\frac{1}{x^2}} \\ &= x^4 (x^2 \text{の } (k-2) \text{ 次式}) x^{-3(k+1)} e^{-\frac{1}{x^2}} + (-3k)x^2 (x^2 \text{の } (k-1) \text{ 次式}) x^{-3(k+1)} e^{-\frac{1}{x^2}} + 2(x^2 \text{の } (k-1) \text{ 次式}) x^{-3(k+1)} e^{-\frac{1}{x^2}} \\ &= (x^2 \text{の } k \text{ 次式}) x^{-3(k+1)} e^{-\frac{1}{x^2}} \end{aligned}$$

$x = 0$ では, $f^{(k)}(x) = \left(\sum_{i=0}^{k-1} a_i x^{2i} \right) x^{-3k} e^{-\frac{1}{x^2}}$ とおいて,

$$\begin{aligned} f'(0) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f^{(k)}(h) - f^{(k)}(0)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \sum_{i=0}^{k-1} a_i \frac{-e^{\frac{1}{h^2}}}{h^{3k+1-2i}} \\ &= \sum_{i=0}^{k-1} \lim_{h \rightarrow 0} a_i \frac{-e^{\frac{1}{h^2}}}{h^{3k+1-2i}} \\ &= 0 \end{aligned}$$

よって, $n = k + 1$ でも成立. 数学的帰納法より, $x = 0$ で $f^{(n)} = 0$, $x \neq 0$ で $f^{(n)}(x) = \frac{(x^2 \text{の } (n-1) \text{ 次式})}{x^{3n}} e^{-\frac{1}{x^2}}$ が言えて, $f^{(n)}(0) = 0$. また, $f^{(n+1)}(x)$ が存在するので, $f^{(n)}(x)$ は連続. よって, $f(x)$ は C^∞ -関数.

コメント 少し微分してみれば規則性が見えてくる. (x^2 の $(n-1)$ 次式)の細かい係数は, 問題にはあまり関係ないので, 拘らない方が良さそう.

問 12.

(a)

$$\begin{aligned} \lim_{x \rightarrow 0} \frac{\cos x - 1}{x^2 \cos x} &= \lim_{x \rightarrow 0} \left(-\frac{1}{\cos x} \frac{1 - \cos x}{x^2} \right) \\ &= -\frac{1}{2} \end{aligned}$$

(b)

$$\frac{\sin x}{x} = 1 - \frac{x^2}{3!} + \frac{x^4}{5!} + \dots$$

$$\begin{aligned} \frac{1}{x^2} \log \frac{\sin x}{x} &= \frac{1}{x^2} \log \left(1 + \left(-\frac{x^2}{3!} + \frac{x^4}{5!} \right) \right) \\ &= \frac{1}{x^2} \left\{ \left(-\frac{x^2}{3!} + \frac{x^4}{5!} \right) - \frac{1}{2} \left(-\frac{x^2}{3!} + \frac{x^4}{5!} \right)^2 + \dots \right\} \\ &= -\frac{1}{6} - \frac{1}{180} x^2 + \dots \\ \therefore \lim_{x \rightarrow 0} \frac{1}{x^2} \log \frac{\sin x}{x} &= -\frac{1}{6} \end{aligned}$$

e^x は連続関数なので,

$$\therefore \lim_{x \rightarrow 0} \left(\frac{\sin x}{x} \right)^{\frac{1}{x^2}} = e^{-\frac{1}{6}}$$

(c) $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{\log x}{x} = 0$ を示す. $x = e^t$ とおいて, $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{x}{e^t} = 0$ を示せばよい. $t > 0$ では $e^t = 1 + t + \frac{t^2}{2} + \dots > \frac{t^2}{2}$ なので,

$$0 < \frac{t}{e^t} < \frac{2}{t}$$

よって, $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{x}{e^t} = 0$. すると, $t = \log x$ として,

$$\begin{aligned} \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{\log x}{\log x + \log \log x} &= \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{1 + \frac{\log \log x}{\log x}} \\ &= \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{1 + \frac{\log t}{t}} \\ &= 1 \end{aligned}$$

コメント 期末に出そうな問題なのでしっかりチェックしておこう.

問 13.

$$\begin{aligned} x \cot x &= x \cdot \frac{\cos x}{\sin x} \\ &= x \cdot \frac{(e^{ix} + e^{-ix})/2}{(e^{ix} - e^{-ix})/2i} \\ &= ix \cdot \frac{e^{2ix} + 1}{e^{2ix} - 1} \\ &= ix \cdot \left(\frac{2}{e^{2ix} - 1} + 1 \right) \\ &= \frac{2ix}{e^{2ix} - 1} + \frac{2ix}{2} \end{aligned}$$

ここで, $\frac{x}{e^x - 1} + \frac{x}{2} = 1 - \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(-1)^n B_n x^{2n}}{(2n)!}$ なので,

$$x \cot x = 1 - \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(-1)^n B_n (2ix)^{2n}}{(2n)!} = 1 - \sum_{n=1}^{\infty} \frac{2^{2n} B_n x^{2n}}{(2n)!} \quad (1)$$

また,

$$\begin{aligned} \frac{2x^2}{x^2 - n^2\pi^2} &= -\frac{2x^2}{n^2\pi^2} \frac{1}{1 - \frac{x^2}{n^2\pi^2}} \\ &= -2 \frac{x^2}{n^2\pi^2} \left(1 + \frac{x^2}{n^2\pi^2} + \frac{x^4}{n^4\pi^4} + \cdots \right) \\ &= -2 \sum_{m=1}^{\infty} \left(\frac{x^2}{n^2\pi^2} \right)^m \end{aligned}$$

$\cot x$ の部分分数分解の公式より,

$$\begin{aligned} x \cot x &= 1 + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{2x^2}{x^2 - n^2\pi^2} \\ &= 1 - 2 \sum_{n=1}^{\infty} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{x^{2m}}{n^{2m}\pi^{2m}} \\ &= 1 - 2 \sum_{m=1}^{\infty} \left\{ \left(\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^{2m}} \right) \frac{x^{2m}}{\pi^{2m}} \right\} \\ &= 1 - 2 \sum_{m=1}^{\infty} \frac{\zeta(2m)}{\pi^{2m}} x^{2m} \end{aligned}$$

(1) と比較して,

$$\frac{\zeta(2m)}{\pi^{2m}} = \frac{2^{2n} B_n}{(2n)!} \iff \zeta(2m) = \frac{2^{2n-1} B_n}{(2n)!} \pi^{2m}$$

$m = 1, 2$ として, $B_1 = \frac{1}{6}, B_2 = \frac{1}{30}$ なので,

$$\zeta(2) = \frac{\pi^2}{6}, \zeta(4) = \frac{\pi^2}{90}$$

コメント 右辺についてはそれほど難しくないと思われる。左辺は少し技巧的な変形が必要だが、思いつかなくとも、 $x \cot x = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$ として、

$$x \cos x = \sin x \cdot \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$$

を展開して係数を比べれば $\zeta(2), \zeta(4)$ は求まる。

問 14.

$$F(x) = \begin{vmatrix} f(x) & g(x) & h(x) \\ f(a) & g(a) & h(a) \\ f(b) & g(b) & h(b) \end{vmatrix}$$

とおくと、 $F(x)$ は $[a, b]$ で連続、 (a, b) で微分可能、 $F(a) = F(b) = 0$ となる。ゆえに、Rolle の定理より、ある $c \in (a, b)$ が存在して、

$$F'(c) = 0 \iff \begin{vmatrix} f'(c) & g'(c) & h'(c) \\ f(a) & g(a) & h(a) \\ f(b) & g(b) & h(b) \end{vmatrix} = 0$$

$h(x) = 1$ とすれば、 $h'(c) = 0, h(a) = h(b) = 1$ なので、

$$\begin{aligned} & \begin{vmatrix} f'(c) & g'(c) & 0 \\ f(a) & g(a) & 1 \\ f(b) & g(b) & 1 \end{vmatrix} = 0 \\ \iff & \begin{vmatrix} f'(c) & g'(c) \\ f(a) & g(a) \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} f'(c) & g'(c) \\ f(b) & g(b) \end{vmatrix} \\ \iff & f'(c) : g'(c) = (f(a) - f(b)) : (g(a) - g(b)) \end{aligned}$$

これは、Cauchy の平均値の定理である。

コメント 平均値の定理や Cauchy の平均値の定理の証明と同様に、まず $x = a, x = b$ で 0 になる関数を見つけて、Rolle の定理を用いる、という手順を踏む。

問 15.

(a)

$$\begin{aligned} f_x &= y \cos(xy), f_y = x \cos(xy) \\ f_{xx} &= -y^2 \sin(xy), f_{xy} = \cos(xy) - xy \sin(xy), f_{yy} = -x^2 \sin(xy) \end{aligned}$$

(b)

$$\begin{aligned} f_x &= -\frac{y}{x^2}, f_y = \frac{1}{x} \\ f_{xx} &= \frac{2y}{x^3}, f_{xy} = -\frac{1}{x^2}, f_{yy} = 0 \end{aligned}$$

(c)

$$\begin{aligned} f_x &= \frac{2x}{x^2 + y^2}, f_y = \frac{2y}{x^2 + y^2} \\ f_{xx} &= \frac{2(y^2 - x^2)}{(x^2 + y^2)^2}, f_{xy} = -\frac{4xy}{(x^2 + y^2)^2}, f_{yy} = \frac{2(x^2 - y^2)}{(x^2 + y^2)^2} \end{aligned}$$

(d)

$$\begin{aligned} f_x &= \frac{1}{x + \sin y}, f_y = \frac{\cos y}{x + \sin y} \\ [f_{xx} &= -\frac{1}{(x + \sin y)^2}, f_{xy} = -\frac{\cos y}{(x + \sin y)^2}, f_{yy} = -\frac{1 + x \sin y}{(x + \sin y)^2} \end{aligned}$$

コメント 微分するだけである. 説明は不要であろう.

問 16.

$$\left(\frac{\partial g}{\partial u}, \frac{\partial g}{\partial v}\right) = \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}\right) \begin{pmatrix} \frac{\partial x}{\partial u} & \frac{\partial x}{\partial v} \\ \frac{\partial y}{\partial u} & \frac{\partial y}{\partial v} \end{pmatrix} = \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}\right) \begin{pmatrix} \cos \alpha & -\sin \alpha \\ \sin \alpha & \cos \alpha \end{pmatrix}$$

$$\begin{aligned} \left(\frac{\partial g}{\partial u}\right)^2 + \left(\frac{\partial g}{\partial v}\right)^2 &= \left(\frac{\partial f}{\partial x} \cos \alpha + \frac{\partial f}{\partial y} \sin \alpha\right)^2 + \left(-\frac{\partial f}{\partial x} \sin \alpha + \frac{\partial f}{\partial y} \cos \alpha\right)^2 \\ &= \left(\frac{\partial f}{\partial x}\right)^2 + \left(\frac{\partial f}{\partial y}\right)^2 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \frac{\partial^2 g}{\partial u^2} &= \left(\frac{\partial}{\partial x} \cos \alpha + \frac{\partial}{\partial y} \sin \alpha\right) \left(\frac{\partial f}{\partial x} \cos \alpha + \frac{\partial f}{\partial y} \sin \alpha\right) \\ &= \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} \cos^2 \alpha + \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y} \sin 2\alpha + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2} \sin^2 \alpha \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \frac{\partial^2 g}{\partial v^2} &= \left(-\frac{\partial}{\partial x} \sin \alpha + \frac{\partial}{\partial y} \cos \alpha\right) \left(-\frac{\partial f}{\partial x} \sin \alpha + \frac{\partial f}{\partial y} \cos \alpha\right) \\ &= \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} \sin^2 \alpha - \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y} \sin 2\alpha + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2} \cos^2 \alpha \end{aligned}$$

$$\therefore \frac{\partial^2 g}{\partial v^2} + \frac{\partial^2 g}{\partial u^2} = \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2}$$

コメント Jacobi 行列を用いて変数を変換するだけである. 特に難しいところもあるまい.

問 17.

$h, k > 0$ に対して, $P(a, b), Q(a+h, b), R(a, b+k), S(a+h, b+k)$ とし,

$$\Delta = (f(S) - f(R)) - (f(P) - f(Q)) = f(P) + f(S) - f(Q) - f(R)$$

とおく. $g(x) = f(x, b+k) - f(x, b)$ として,

$$\Delta = g(a+h) - g(a)$$

$f(x)$ は C^2 級なので, 平均値の定理より, $0 < \theta < 1$ が存在して,

$$\Delta = hg'(a+\theta h) = h(f_x(a+\theta h, b+k) - f_x(a+\theta h, b))$$

再び平均値の定理より, $0 < \varphi < 1$ が存在して,

$$\Delta = hkf_{xy}(a+\theta h, b+\varphi k)$$

f_{xy} は連続なので,

$$\lim_{h \rightarrow 0, k \rightarrow 0} \frac{\Delta}{hk} = f_{xy}(a, b)$$

同様にして,

$$\lim_{h \rightarrow 0, k \rightarrow 0} \frac{\Delta}{hk} = f_{yx}(a, b)$$

ゆえに,

$$f_{xx}(x, y) = f_{yx}(x, y)$$

コメント 上記の P, Q, R, S を用いれば, $f_x(a, b)$ は $\frac{f(Q) - f(P)}{h}$ で, $f_x(a, b+k)$ は $\frac{f(S) - f(R)}{h}$ は近似できる. $f_{xy}(a, b)$ は $\frac{f_x(a, b+k) - f_x(a, b)}{k}$ で近似できるので, 結局, $f_{xy}(a, b) \approx \frac{f(P) + f(S) - f(Q) - f(R)}{hk}$ となる. これが Δ の由来である. あとは, “近似” を平均値の定理で厳密に言い表してやればいい.

問 18.

$$\begin{aligned}
 \left(\frac{\partial}{\partial r}, \frac{\partial}{\partial \theta}, \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) &= \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right) \begin{pmatrix} \frac{\partial x}{\partial r} & \frac{\partial x}{\partial \theta} & \frac{\partial x}{\partial \varphi} \\ \frac{\partial y}{\partial r} & \frac{\partial y}{\partial \theta} & \frac{\partial y}{\partial \varphi} \\ \frac{\partial z}{\partial r} & \frac{\partial z}{\partial \theta} & \frac{\partial z}{\partial \varphi} \end{pmatrix} \\
 &= \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right) \begin{pmatrix} \sin \theta \cos \varphi & r \cos \theta \cos \varphi & -r \sin \theta \sin \varphi \\ \sin \theta \sin \varphi & r \cos \theta \sin \varphi & r \sin \theta \cos \varphi \\ \cos \theta & -r \sin \theta & 0 \end{pmatrix} \\
 \therefore \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right) &= \left(\frac{\partial}{\partial r}, \frac{\partial}{\partial \theta}, \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) \begin{pmatrix} \frac{\partial x}{\partial r} & \frac{\partial x}{\partial \theta} & \frac{\partial x}{\partial \varphi} \\ \frac{\partial y}{\partial r} & \frac{\partial y}{\partial \theta} & \frac{\partial y}{\partial \varphi} \\ \frac{\partial z}{\partial r} & \frac{\partial z}{\partial \theta} & \frac{\partial z}{\partial \varphi} \end{pmatrix}^{-1} \\
 &= \left(\frac{\partial}{\partial r}, \frac{\partial}{\partial \theta}, \frac{\partial}{\partial \varphi} \right) \begin{pmatrix} \sin \theta \cos \varphi & \sin \theta \sin \varphi & \cos \theta \\ \frac{1}{r} \cos \theta \cos \varphi & \frac{1}{r} \cos \theta \sin \varphi & -\frac{1}{r} \sin \theta \\ -\frac{1}{r \sin \theta} \sin \varphi & \frac{1}{r \sin \theta} \cos \varphi & 0 \end{pmatrix}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 \frac{\partial^2}{\partial z^2} &= \left(\cos \theta \frac{\partial}{\partial r} - \frac{\sin \theta}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \right)^2 \\
 &= \cos \theta \frac{\partial}{\partial r} \left(\cos \theta \frac{\partial}{\partial r} \right) - \cos \theta \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{\sin \theta}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \right) - \frac{\sin \theta}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\cos \theta \frac{\partial}{\partial r} \right) + \frac{\sin \theta}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\frac{\sin \theta}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \right) \\
 &= \cos^2 \theta \frac{\partial^2}{\partial r^2} - \cos \theta \left(-\frac{\sin \theta}{r^2} \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{\sin \theta}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} \right) - \frac{\sin \theta}{r} \left(-\sin \theta \frac{\partial}{\partial r} + \cos \theta \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} \right) + \frac{\sin \theta}{r} \left(\frac{\cos \theta}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{\sin \theta}{r} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} \right) \\
 &= \cos^2 \theta \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{\sin \theta \cos \theta}{r^2} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\sin \theta \cos \theta}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} + \frac{\sin^2 \theta}{r} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{\sin \theta \cos \theta}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} + \frac{\sin \theta \cos \theta}{r^2} \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{\sin^2 \theta}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} \\
 &= \cos^2 \theta \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{\sin^2 \theta}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} - \frac{\sin 2\theta}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} + \frac{\sin^2 \theta}{r} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\sin 2\theta}{r^2} \frac{\partial}{\partial \theta}
 \end{aligned}$$

同様にして,

$$\begin{aligned}
 \frac{\partial^2}{\partial x^2} &= \left(\sin \theta \cos \varphi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta \cos \varphi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\sin \varphi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right)^2 \\
 &= \sin^2 \theta \cos^2 \varphi \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{\cos^2 \theta \cos^2 \varphi}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \frac{\sin^2 \theta}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \\
 &\quad + \frac{\sin 2\theta \cos^2 \varphi}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} - \frac{\sin 2\varphi}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \varphi} - \frac{\cos \theta \sin 2\varphi}{r^2 \sin \theta} \frac{\partial^2}{\partial \theta \partial \varphi} \\
 &\quad + \frac{\cos^2 \theta \cos^2 \varphi + \sin^2 \varphi}{r} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta (\sin^2 \varphi - 2 \sin^2 \theta \cos^2 \varphi)}{r^2 \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{\sin 2\varphi}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \\
 \frac{\partial^2}{\partial y^2} &= \left(\sin \theta \sin \varphi \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta \sin \varphi}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{\cos \varphi}{r \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi} \right)^2 \\
 &= \sin^2 \theta \sin^2 \varphi \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{\cos^2 \theta \sin^2 \varphi}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \frac{\cos^2 \theta}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \\
 &\quad + \frac{\sin 2\theta \sin^2 \varphi}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} + \frac{\sin 2\varphi}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \varphi} + \frac{\cos \theta \sin 2\varphi}{r^2 \sin \theta} \frac{\partial^2}{\partial \theta \partial \varphi} \\
 &\quad + \frac{\cos^2 \theta \sin^2 \varphi + \cos^2 \varphi}{r} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta (\cos^2 \varphi - 2 \sin^2 \theta \sin^2 \varphi)}{r^2 \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} - \frac{\sin 2\varphi}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial}{\partial \varphi}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\therefore \Delta &= \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \\ &= \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \frac{1}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} + \frac{2}{r} \frac{\partial}{\partial r} + \frac{\cos \theta}{r^2 \sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta}\end{aligned}$$

コメント 果てしなく面倒だが、手順どおりにやればできる問題である。微分演算子を左からかけると、右に来るものを微分してしまうことに注意しよう。すなわち、例えば

$$\begin{aligned}(\text{誤}) \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \right) &= \frac{1}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} \\ (\text{正}) \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \right) &= \frac{1}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} - \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial \theta}\end{aligned}$$

となる。すると、掛ける順序によって結果が変わることになる。上の例で言えば、

$$\frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \right) = \frac{1}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} - \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial \theta} \neq \frac{1}{r} \frac{\partial^2}{\partial r \partial \theta} = \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\frac{\partial}{\partial r} \right)$$

そのため、 a, b, c が微分演算子を含んだ式するとき、 $(a+b+c)^2 = a^2 + b^2 + c^2 + 2(ab+bc+ca)$ とはできず、いちいち $(a+b+c)^2 = aa+ab+ac+ba+bb+bc+ca+cb+cc$ のように計算しなければならない。

問 19.

(a)

$$\begin{aligned}\begin{cases} f_x = 3x^2y + y^3 - y = 0 \\ f_y = x^3 + 3xy^2 - x = 0 \end{cases} &\iff \begin{cases} y(3x^2 + y^2 - 1) = 0 \\ x(x^2 + 3y^2 - 1) = 0 \end{cases} \\ &\iff (y = 0 \wedge (x = 0 \vee x = \pm 1)) \vee (x = 0 \wedge y = \pm 1) \vee (3x^2 + y^2 = x^2 + 3y^2 = 1) \\ &\iff (x, y) = (0, 0), (0, \pm 1), (\pm 1, 0), \left(\pm \frac{1}{2}, \pm \frac{1}{2}\right) \text{ (複合任意)}\end{aligned}$$

ヘッセ行列 $H = \begin{pmatrix} f_{xx} & f_{xy} \\ f_{xy} & f_{yy} \end{pmatrix}$ は、

$$H = \begin{pmatrix} 6xy & 3x^2 + 3y^2 - 1 \\ 3x^2 + 3y^2 - 1 & 6xy \end{pmatrix}$$

$$\text{tr} H = 12xy$$

$$\det H = -9x^4 + 18x^2 - 9y^4 + 6x^2 + 6y^2 - 1$$

$\det H > 0$ となるのは、 $(x, y) = (\pm \frac{1}{2}, \pm \frac{1}{2})$ のとき ($\det H = 2$)。 $(x, y) = \pm (\frac{1}{2}, \frac{1}{2})$ のとき $\text{tr} H = 3 > 0$ なので極小。 $(x, y) = \pm (\frac{1}{2}, -\frac{1}{2})$ のとき $\text{tr} H = -3 < 0$ なので極大。

$$\therefore \begin{cases} \left(\frac{1}{2}, \frac{1}{2}\right), \left(-\frac{1}{2}, -\frac{1}{2}\right) \text{ で極小値 } -\frac{1}{8} \\ \left(-\frac{1}{2}, \frac{1}{2}\right), \left(\frac{1}{2}, -\frac{1}{2}\right) \text{ で極小値 } \frac{1}{8} \end{cases}$$

(b)

$$\begin{cases} f_x = 2x + y - 5 = 0 \\ f_y = x + 2y - 4 = 0 \end{cases} \iff \begin{cases} x = 2 \\ y = 1 \end{cases}$$

$$H = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$$

$$\text{tr} H = 4 > 0$$

$$\det H = 3 > 0$$

$\therefore (2, 1)$ で極小値 -7

コメント 2 変数関数 $f(x, y)$ の極値の求め方について説明する. $f_x(x, y) = f_y(x, y) = 0$ を解いて $(x, y) = (a, b)$ が得られたとする. ヘッセ行列 $H(x, y) = \begin{pmatrix} f_{xx}(x, y) & f_{xy}(x, y) \\ f_{xy}(x, y) & f_{yy}(x, y) \end{pmatrix}$ に (a, b) を代入して, $\det H(a, b) > 0$ となることが極値を取る十分条件である. そのとき, $\text{tr} H > 0$ であれば極小値, $\text{tr} H < 0$ であれば極大値である. $\det H(a, b) < 0$ のときは鞍点となり, 極値は取らない. $\det H = 0$ のときには 3 次以上の項も調べなければならない. テストで出るとしたら, $\det H = 0$ の場合は出ないだろうからあまり気にしなくとも良い.